

## Abstract

# 先天性血液凝固異常症患者においても経頸静脈的肝生検は安全でC型肝炎ウイルス感染の診断に有用である

Transjugular liver biopsy is safe and diagnostic for patients with congenital bleeding disorders and hepatitis C infection

D. M. DiMichele, G. Mirani, P. Wilfredo Canchis, D. W. Trost and A. H. Talal

重症の先天性血液凝固異常症患者における慢性C型肝炎ウイルス(HCV)感染の有病率は98%と極めて高い。しかしながら、治療技術の進歩により現在では50%以上の患者で持続的効果が認められている。C型肝炎の治療に関して最近米国国立保健研究所(NIH)により推奨事項が発表されたが、この推奨事項は肝の炎症および線維症の組織学的評価を直接的に行える肝生検が、正確な診断そして治療方針の決定に依然重要であることを再確認するものであった。経皮肝生検はシンプルで標準化された手技で、迅速に実施できるうえ、比較的安価であることから、先天性血液凝固異常症患者でも安全に施行されている。しかし、後天性血液凝固異常症患者に推奨されている経静脈的アプローチ(経頸静脈的肝生検;TJLB)については、先天性血液凝固異常症患者における安全性と有効性がほとんど検討されていない。今回我々は、当施設において先天性血液凝固異常症患者13例(すべて成人、平均年齢33歳)に

施行したTJLBについて報告する。これら13例の内訳は、軽症～重症の血友病AまたはB(10例)、von Willebrand病(1例)、第V因子欠乏症(1例)および第XIII因子欠乏症(1例)である。データはカルテを後方視的にレビューして収集した。TJLBは当施設のプロトコールに従って行われ、出血予防のための治療が1～5日間行われた。患者の入院期間は48時間以内で済み、いずれの症例においても出血はみられず、全例において忍容性が良好であった。しかし、特に治療を必要としない腹部不快感が3例に認められ、うち1例は一過性のトランスアミンアーゼ血症を伴っていた。全例から診断用の検体が得られ、以降の治療方針の決定に有用であった。これらの結果から、TJLBは種々の専門分野の医療スタッフの協力により先天性血液凝固異常症患者において経皮的アプローチに代わる安全で有用、また可能性として費用対効果に優れた検査法であるといえる。